三鷹市山本有三記念館館報
Yuzo Yamamoto Memorial Museum Report
第8号
2013.3

企画展
三鷹の家のものがたり
建築図面から探る住まいの履歴書

ピクチャレスク風の外観が目を惹く山本有三記念館は、大正末期の創建当時に流行していたデザインと最先端の構造を併せ持つ本格的な洋風住宅です。1936（昭和11）年から約10年間、有三はこの家で暮らし、代表作「路傍の石」や戯曲「米百俵」を執筆しました。有三が転居した後、建物には度々手が加えられており、当時の姿は明らかではありません。

本展は現存する改修工事図面などを基に、三鷹の家の創建時や有三居住時の姿を探ろうとするものです。三鷹の住宅史と重ねながら、魅力と謎に満ちた建物の経歴を辿ります。

会期　2013年3月2日から9月1日まで

山本有三記念館（旧清田龍之助邸）の秘密

内田　青蔵（神奈川大学教授・建築史家）

1　はじめに

山本有三記念館は、1936（昭和11）年に山本有三が自邸として購入したものである。この建物は、1956（昭和31）年に東京都へ寄贈され、1985年から三鷹市に移管、1996年から三鷹市山本有三記念館として開館された。その姿は極めて個性的で、そのデザインには竣工当時の大正末期のわが国建築界で話題となっていた様式の影響も見て取れる。こうした魅力的な建築であるにもかかわらず、いまだ設計者は不明であり、加えて、所有者や用途が頻繁に代わり、その度に小幅ながらも改修を繰り返してきた。そのため、現状では創建時の姿も明らかではない。言い換えれば、この建物はわが国戦前期の著名な作家の住まいという文化史的観点からはもちろんのこと、建築史的観点からも貴重な存在といえるものの、いまだ不明な点が多い謎の建築といえる。

そこで、今回、大平茂男氏ら伝統技法研究会の方々のご協力を得て行った目視調査と現存する改修工事図面の検討を基に、この建築の謎の一端を解き明かしつつ、創建時の姿を復原してみることにした。

2　創建時の施主、清田龍之助について

この建物は、山本有三が自ら建てた住宅ではない。吉祥寺に住んでいた山本が、小説の執筆にふさわしい静かな環境を求め、また、4人の子どもと住むには手狭でもあったこともあって、この鬱蒼とした木立の残る約1200坪の土地とともに住まいを購入したのである。山本が49歳の時の出来事である（1）。

この住まいを建てた人物は、清田龍之助（1880－1943）である。この清田については、平山育男氏の労作があり、どのような人物であったかが明らかにされている（2）。ごく簡単に紹介すれば、1880（明治13）年広島県に生まれ、立教中学・立教専修学校を経て、アメリカのケニオン大学、及び、エール大学大学院を修了し、帰国後は、日本電報通信社外国通信部長を経て、1911（明治44）年から東京高等商業学校（現一橋大学）講師、1913（大正2）年には教授となっている。そして、1920（大正9）年に依願退職し、貿易を主とする濱口商事株式会社の重役に転身している。ただ、昭和恐慌の影響で事業は破綻し、清田は再び教師となり、また、晩年はオーストラリアで日本語教育に携わり、1943年に亡くなっている。清田の父親の清田海一郎（1858－1904）は、大阪聖三一神学校を卒業し、浅草聖ヨハネ教会の牧師として活躍した人物であり（3）、長男の龍之助はキリスト教の影響下で育った。立教中学・高校への進学やアメリカ留学という経歴は、こうした父親の影響と思われる。

3　清田邸の建設時期

さて、清田邸の建設時期は、厳密に言えば明らかではない。ただ、建物の登記が1926年12月に行われていることから、建物の竣工を1926（大正15）年と推測しているのである。清田の住宅建設の経緯を振り返ると、三鷹以前、清田は小石川区音羽7－10に住んでいた。この住所は、現在、鳩山御殿として知られる旧鳩山一郎邸と同じで、それ故、清田と鳩山の関係が取りざたされたことがある。平山氏は、同じ敷地の一郭に住んでいたのであろうし、その関係は不明としている。いずれにせよ、この当時、清田は結婚し、3人の子どもがいた。そして、この三鷹の土地は、登記簿によれば1918（大正7）年に入手していた。

1918年当時は、清田は東京高等商業学校教授として活躍していた時期で、おそらく、当時、わが国では喧騒な都心部から離れて郊外に住むことが理想と声高に主張されていた時期でもあり、郊外に住まいを構えようと考えていたのであろう。そうした思いの清田の背中を強く押したのが関東大震災であった。ただ、建物が完成したと考えられる1926（大正15）年当時は、清田は同じエール大学の留学経験者であった濱口吉右衛門に請われて濱口商事株式会社の取締役として実業界に転身していた時期であり、おそらく経済的にも余裕があり、震災後の安住のすみかを求め、三鷹に鉄筋コンクリート構造を取り入れた堅牢な住まいを建設したものと思われる。

４　創建時の間取りの復原

創建時の住まいに関する史料は残されていない。ただ、幸いなことに友田博通氏が山本の三女鞠子氏からの聞き取りを基に、山本家当時の間取りを復原している（図１）（４）。この間取り〈山本家復原平面図〉がどこまで創建当時の旧清田邸の様子を示すものかは一考を要するが、少なくとも山本一家がどのような生活をしていたのかを知ることができる。さて、今回の目視調査の結果から作成したのが、清田邸の創建当時の間取りの復原図である〈創建推定復原平面図〉（図２）。その内容を簡単に紹介して見たい。

まず、玄関部。左側のステンドグラスは新しく、後補と思われる。イングルヌック、階段廻りは、間取りは変わらないものの内壁などは変更されている。便所は、当初は、もっと狭く、また、東側の２つの窓は昭和60年時の改造で、当初はなかったものである。

１階中央が食堂と応接間の２部屋に分かれていたことは、それぞれの天井や壁、床のデザインが異なることからも明らかである。ただ、この時期の住宅の間取りの傾向から考え、２部屋を壁で完全に仕切ることはなく、２部屋の間を引込戸などで仕切り、時には繋げて使用するといった形式であったと推定される。

現事務室部分は、当時の造り付けの食器戸棚があり、台所であることは間違いない。ただ、地下室への階段手前の扉は位置が異なり、書生部屋は食器戸棚の痕跡があり、当初は配膳室（パントリー）であったと思われる。祖母の部屋は、当初の用途は特定できないものの、この部屋に連なる便所は外壁の出隅部分の飾りの存在から、後補で、山本の引っ越し時の増築と推定される。長女朋子の部屋は、一部に内玄関が見られるが、この部屋の南側の窓枠の下にもタイルが張られていることから、窓の建具は後付けと考えられる。東側の壁も後補と思われる。すなわち、当初はこの部屋は建具がなく、山本の引っ越し時に室内化されたものと推定される。おそらく、この部屋は創建時は半屋外の解放されたサンルームのような空間で、夏などは朝食や読書などに使用したものと思われる。また、離れの女中部屋は、使用人の部屋の可能性もあるが、当初は隣の浴室の脱衣場を兼ねた化粧室の可能性も考えられる。

山本家復原平面図によれば、２階の洋書斎は、一部に畳が敷かれている。接収解除時と思われる図面では、洋書斎は２部屋に仕切られている。暖炉の存在や西側窓部に造り付けベンチがあることから考えると、現状の一部屋の方がふさわしいが、残念ながら明らかではない。東側の展示室Ｆは、山本家復原平面図によれば、和室で、襖で二つに仕切られている。こちらも詳細は不明である。また、和書斎は、山本の引っ越し時に畳敷きの和室に改造したといわれている部屋で、畳の下には創建時の縁甲板の床が確認できたことから、創建時は洋室であったと考えられる。また、廊下を挟んで北側の展示室Ｄは、書庫とあり出入口が引違の建具だが、暖炉、腰壁、天井などは洋室の設えであり、創建時は暖炉を備えた質の高い洋室であったと考えられる。

５　創建時の旧清田邸の特徴

さて、こうした推測も加えてできあがった創建推定復原平面図を見ると、いくつかの特徴を指摘できる。そのひとつは、イス座の洋風生活を基本とする間取りであることである。すなわち、和室の可能性がある部屋は２階東側の二間続きの部屋と女中部屋だけで、他は基本的にはイス座の洋室である。これは清田がアメリカ留学によりイス座生活に慣れていたことによるものと考えられ、当時の最も進んだ住まいであったといえる。また、１階のイングルヌックは、家族を大切にする象徴的な空間であり、清田がキリスト教の強い影響を受けていたことの現れとも考えられる。また、２階に独立した個室が多いことも特徴といえる。現在、判明している清田の当時の家族構成は、妻と子供３名であり、おそらく子供がそれぞれ独立した個室を構えていた可能性があり、子供を含め個人の生活を重視した住まいであったことが窺える。

一方、間取りと比べると、外観は窓形式が上げ下げ窓から引違などの一部変更されてはいるものの、創建時の姿をよく留めているといえる。その様式的な特徴に関しては、かつて触れたことがある（５）。そのため、ここでは詳しくは触れない。ただ、全体の凹凸のある構成は、あたかも間取りをそのまま立体化させたようで、左右対称を重視した旧来のものとはかけ離れた絵画的な自由さが表現された個性豊かな作品といえる。また、玄関内部の小窓や扉に見られる独特の尖頭アーチ状の形状は、玄関ホールのアーチの稜線を強調した天井と一体となり、強い印象を与えている。こうした独特の形状は、居間や便所の内部扉の嵌め殺しガラスの形状にも取り入れられ、また、扉の蝶番の凹凸のある仕上げや玄関ホールからイングルヌックおよび階段部分にみられる木部の表面の凹凸のある仕上げもまさしくヨーロッパの中世風のデザインといえる。こうした中世風のデザインが繰り返し見て取れるのは、清田のキリスト教との深い結び付きの現れといえ、施主である清田の好みが強くデザインに反映されているといえるであろう。

６　設計者について

清田邸は、デザイン的にはヨーロッパの中世風の影響が見られる。そして、他にもさまざまな影響が見て取れる。イングルヌックの存在は当時のイギリス住宅の影響といえるであろうし、外壁に見られる１階をスクラッチ・タイル仕上げ、２階を白漆喰仕上げとし、そのコントラストを強調したデザインは、大正期に住宅専門会社「あめりか屋」が積極的に採用したデザインで、アメリカのクイーン・アン様式の影響とも考えられる。また、暖炉の大谷石や外壁のスクラッチ・タイルはもとより、２階の出隅部分を強調している木の線材による装飾や１階トイレの鋭角に突出した壁面と庇の構成は、当時帝国

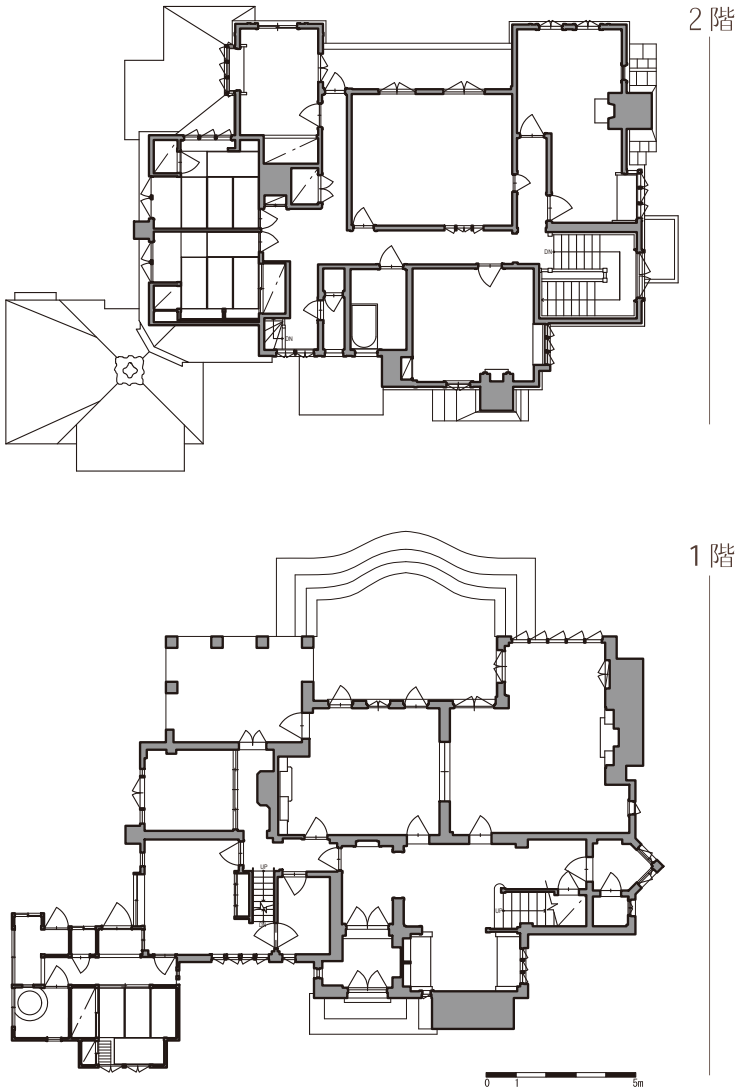

図２　創建時の清田邸プラン（創建推定復原平面図）

図１　友田博通氏作成の「有三とご家族の住まい方」（山本家復原平面図）

ホテルの完成により注目されていたフランク・ロイド・ライト（１８６７-１９５９）の影響といえるであろう。

また、主体構造は、台所を中心とした諸室並びに地下部分は鉄筋コンクリート構造で、他が木造と推定される。鉄筋コンクリート構造が住宅に採用され始めるのは、一般には関東大震災以後のことであり、震災の３年後の１９２６（大正15）年に部分的ではあるものの、住宅建築で火災の危険性のある台所廻りを耐火性の高い鉄筋コンクリート構造としているのは、まさしく、当時の最先端の事例といえるのである。このように、この住宅はデザイン面とともに構造面においても当時のわが国の建築界の動向をよく反映したものといえる。

こうした当時の流行をよく反映した建築であることから、設計者は当時の大正末期の建築界に精通した一流の建築家であったと推定されるが、残念ながら特定できていない。ライト式の影響から、遠藤新や土浦亀城などが候補に挙がるが、現在のところ、彼等の作品リストには清田邸は見られない。また、建築史家の堀勇良氏によればデ・ラランデ事務所に勤務していた粟谷鶉二氏のご遺族から、粟谷氏が設計したと聞いているという情報を得た。粟谷氏は、１９１２（明治45）年東京帝国大学建築学科を卒業した建築家である。屋根のデザインなどにドイツ風の雰囲気が感じられ、デ・ラランデのもとでドイツ風のスタイルを学んだ人物という可能性も否定はできないが、現在のところ、残念ながらその確たる証拠は入手できていない。

１「山本有三と三鷹の家」『解説　三鷹市山本有三記念館』（三鷹市芸術文化振興財団　２００９年）所収
２平山育男「旧山本有三邸を建てた清田龍之助とは」同右書所収
３浅草聖ヨハネ教会百年誌編集・出版委員会『浅草に召されて－浅草聖ヨハネ教会百年史』（日本聖公会浅草聖ヨハネ教会　１９８６年）所収
４友田博通「三鷹の文化の香りと閑静な郊外住宅地のイメージを後世に伝える」『山本有三と三鷹の家と郊外生活』（三鷹市芸術文化振興財団　２００６年）所収
５拙稿「山本有三邸のデザイン解読」『解説　三鷹市山本有三記念館』前掲書所収

ガイドボランティアリポート 8　記念館で活動中のガイドボランティアより交代でリポートをお届けします

波紋

有三にまつわるエピソードは多種多様に広がっていることから、本館ガイドは難しくもあり、楽しくもあります。

有三その人と作品。劇作家としての姿。役者（尾上菊五郎・中村吉右衛門・水谷八重子等）との交流秘話。政治活動。自身作品の外国語翻訳。この建造物。池に投げ入れられた石から広がる波紋のように、ガイドは続きます。

来館者との対話を通じて、このユニークな記念館で、ガイドとして学び続けたいと願っています。

（石丸 久美子）

花ごよみ

記念館のお庭マップ「花ごよみ」ができました。

ガイドになって初めて知ったこと……梅雨のなか芝生に咲くネジ花、夏のエゴノキの白い実、藪ミョウガの可愛い花、葉にセミの抜け殻をたくさん付けるビワの木、晩夏に実を落とすスダジイ、秋は金木犀に銀木犀、そして紅葉。

有三が好んだ竹、そしてハナミズキは春の花も紅葉も赤い実も四季を通じて楽しめます。

ご来館の皆様にも、シルバー人材センターの方がお世話してくださる花壇とお庭の自然を楽しんでいただきたいですね。

（小林 起與子）

帝国ホテルの建築

木下 和也（神奈川大学大学院生）

帝国ホテルはアメリカ人建築家フランク・ロイド・ライト設計により、1923（大正 12）年に東京・日比谷に完成した。その独特のデザインから「ライト風」と称された建築ブームが昭和初頭にかけて起こった。老朽化のため 1967（昭和 42）年に解体され、中央玄関部分のみ博物館明治村に保存展示されている（図 1）。

帝国ホテルに見られる「ライト風」の特徴は主にデザインと素材の 2 つが挙げられる。前者のデザインは、軒や手摺に用いた大谷石の帯による水平性の強調、床の高低や天井の高さを様々に組み合わせた立体的な空間構成、内外に施された幾何学的装飾といった手法がみられる。特にマヤ文明にインスピレーションを得たという幾何学的装飾は、当時のライトが好んで用いたモチーフで、帝国ホテルにおいては外観のみならず、内装のディティールに至るまで徹底して施されており、その特異ともいえる圧倒的な密度の装飾が帝国ホテルを印象付けるものとなる（図 2）。

図 1 旧帝国ホテル中央玄関全景（博物館明治村）

図 2 幾何学的装飾（博物館明治村）

後者の素材については、大谷石とスクラッチ・タイルの使用が挙げられる。大谷石はライト特有の幾何学的装飾を可能とする、加工し易く大量に手に入れられる事から着目したとされる。従来、門塀工事や暗渠といった付帯工事に用いられる事がほとんどだったが帝国ホテルでの使用を契機に外装材として一躍脚光を浴びるようになった。スクラッチ・タイルはスダレ煉瓦とも呼ばれ、表面に付けられた竪溝が特徴である。型枠としてコンクリートを流し込みながら施工し、そのまま外装仕上げ材として使用する。帝国ホテルに用いられたスクラッチ・タイルは約 400 万丁と言われ、製造は愛知県常滑に直営工場「帝国ホテル煉瓦製造所」を設置して行われた。表面の竪溝を綺麗に仕上げる方法は様々な試行錯誤を繰り返し、最終的には釘を等間隔で打ちつけた板を両手で持ち、慎重に溝切りが行われた。こうした素材の使用が帝国ホテルのデザインをより特色あるものに仕上げている。

山本有三記念館の 1 階及び 2 階下部の壁面を飾る大谷石とスクラッチ・タイルの使用は「ライト風」の特徴といえる。次にデザインの面では、2 階外壁の隅部等に配した木材装飾や階段室踊り場の窓ガラス、2 階の各窓枠などの幾何学的装飾にライトの影響がみられる。

参考文献：
谷川正己『日本の建築　明治・大正・昭和　9. ライトの遺産』（三省堂　1980 年）
谷川正己「帝国ホテルとテラコッタ」『建築のテラコッタ』（INAX 出版　1983 年）所収

編集・発行　三鷹市山本有三記念館
〒181-0013 東京都三鷹市下連雀 2-12-27　電話 0422-42-6233　ホームページ http://mitaka.jpn.org/yuzo/
開館時間：午前 9 時 30 分～午後 5 時
休 館 日：月曜日及び年末年始（12 月 29 日～ 1 月 4 日）　※月曜日が祝日の場合は開館し、翌日と翌々日を休館。
入 館 料：300 円（20 名以上の団体 200 円）　※中学生以下、障害者手帳持参の方とその介助者、校外学習の高校生以下と引率教諭は無料。
アクセス：ＪＲ中央線「三鷹駅」南口より徒歩 12 分、ＪＲ中央線・京王井の頭線「吉祥寺駅」南口（公園口）より徒歩 20 分